まちの未来を描く ～公・民・学による都市・空間づくりの可能性～

■日時　2012 年 1 月 24 日（火）　14:00～16:00
■場所　（財）名古屋都市センター　13 階 大研修室

1. 講演

「地域まちづくりにおける様々な連携の可能性」

村山顕人氏（名古屋大学大学院准教授）

○地域と大学、研究の問題意識

・大学資源、地域資源を融合し、まちづくりの共同体となることが必要。
・様々なスケールの環境問題に対して、自治体や家庭で出来ることはあるが、実効性や推進力などを考えると、地区スケールの取り組みが問題解決に適しているのではないか。

○EcoDistricts Initiative と地域まちづくりへの期待

・Portland Sustainability Institute が実践する EcoDistricts Initiative とは、様々な環境技術をまちづくりの中に組み込み、地区スケールの取り組みから都市の持続性を加速させる取り組みのことである。現在市内で５つの地区を選定し、実験的に取り組みを行っている。【例　住宅地におけるオープンスペースの整備やバイオスウェール（雨を地表面に吸収させるグリーンインフラ）の整備　等】
・名古屋でも地区スケールで考える時期が来ている。各分野別マスタープランにおいては、地域（地区）スケールに期待する内容が多く、様々な分野を地域スケールで統合するまちづくり構想・計画が必要ではないか。様々な政策をいかに空間的に調整して行くのかというところで、空間計画、まちづくり構想・計画の必要性が増し、地域まちづくりへの期待が高まる。
・名古屋市の都市計画マスタープランは、地域別構想を作っていない。地域スケールで任意のまちづくり構想が作成されると、その中で都市計画的に対応すべきところは都市計画マスタープランに位置付ける形をとっている。しかし、形を作っただけでは地域のまちづくりは動かないので、実践するためのサポート制度（コンサルタント活用助成等）がマスタープランに先駆けてつくられた。今後モデルや支援ツールをつくる必要がある。

○地域まちづくり、都市空間づくりに関わる枠組み

・地域まちづくり、都市空間づくりには様々な枠組みがある。
・市民力の向上：地域まちづくりではパートナーシップ以上の関係が行政権力と市民の間に必要。
・都市計画としての明確な vision の提示。
・計画策定時において、現況分析・将来予測偏向から、デザイン重視へ。
・デザイン・プロセスとパブリック・プロセスを同時に考える

・都市空間デザインには様々な分野の専門家が関わる。

〇地域まちづくりへの大学研究室の関わり（2011 年度の取り組み事例から）

・K 市総合計画審議会：大学研究者の参加として旧来の方法である審議会への参加でも、やり方を変えることで硬直性が解消される。

・F 町のまちづくり：住民からの依頼で、行政との協議や地域のまちづくりへの意見統一を支援する。地域から大学へ依頼があり、研究としてまちづくりを行っている

・錦二丁目長者町まちづくり：まちづくり構想の作成。例えば、都市の木質化プロジェクトでは名古屋大学の生命農学研究科の教員と協働するなど、分野に限らず複数の大学が協力・連携してまちづくりを行っている。

〇まとめ

・地域まちづくりには多様な主体が参加

・主体の参加、主体の関係は、地域や取り組み経緯によって様々であり、内容によっては都市計画・まちづくりの専門家による適切なサポートが必要。現在サポートの方法を示すモデルがなく、試行錯誤しているため、その方法のモデル化が必要。

・大学研究室には、客観性、新規性、独創性、中立性が求められており、これらがないと地域での賛同が得られない。社会を変えて行くイノベーティブな取り組みが必要。

・研究室の役割は、新しい情報や考え方を提示することだが、それらを伝える有効なメディアが必要。

「都市の未来像を描く～UDCKが進める公民学連携による都市デザインの実践～」

三牧浩也氏（柏の葉アーバンデザインセンター副センター長）

〇柏の葉の概要とまちづくりの経緯

・土地区画整理により出来たまち。つくばエクスプレスが通り、柏たなか駅、柏の葉キャンパス駅の２つの駅がある。柏市の第 2 の中心地として、440ha の大規模開発が現在進んでいる。

・周辺には、東京大学、千葉大学、国立がんセンターなど国の施設が多く立地する。これらの資源を活かしながら、まちづくりに取り組んでいる。

・各大学のキャンパスで行われる研究は、新しい研究・横の連携による学融合が求められている。大学が地域に入り、横断的な研究を行うという公民学の連携方法。

〇UDCK とは

・行政中心、企業資本への依存、市民への押し付け、専門家の限定的・固定的関与等現在の一般的なまちづくりの構図は課題や限界も抱える。そのため、公民学が一体・フラットとなって連携するまちづくり

を行う拠点となるのが UDCK。

・オープンでシンボリックな建物で、年間多くの利用があり、まちづくりの拠点として利用されている。

・企業、大学、行政等７つの主体が場・資金・人を提供して UDCK を運営している。

・市民、行政、大学、企業が連携してまちづくりを行うための共有のビジョンとして「キャンパスタウン構想」を策定。

・「キャンパスタウン構想」は、大学と行政が共同で作ったまちづくり構想。単純で明快な構想（あるべき姿＝vision）、具体的な目標達成を掲げ、これを共通言語としてまちづくりを行うことで、事業が進むことによる目標からのブレを防いでいる。

○柏の葉のアーバンデザインの事例

・柏の葉キャンパス駅前街区のデザインレビュー：提示したアーバンデザイン方針に賛同する業者のみ入札に参加可能とし、供用開始まで、事業者とアーバンデザイン委員会による調整が行われる。最初のコンセプトは劣化しやすいものだが、目を見張らせることでコンセプト劣化を防いでいる。

・柏たなか農あるまちづくり：農地や都市農業をどう維持するかという問題に対して、大学・農家・行政・JA と一体となった体制をつくり、体験農園の開設・運営やガイドブック作成による地権者との意識共有を行っている。

・緑園の道づくり：駅から小学校にいたる区画道路の緑化デザインを行政へ提案・誘導。「キャンパスタウン構想」というベースで共有する思想があるから、行政等の協力が得やすい。

○現状と課題（まとめ）

・フラットな連携、専門家の継続的関与により、様々な提案と多くの議論が生まれてきた。今後は、いくつもの案に対する実現性が課題となる。

・土地区画整理事業の硬直性や合意形成に係る課題（市民参加一部的）、資金的課題（事業費・維持管理費等の負担）がある。

・「いいものを作ったら地域に還元される」という仕組みをつくって、これらの課題を突破していかないといけない。

・現在、専門化がボランティアという形で係ることが多い。この形が正しいのか、専門家の関与についても仕組みづくりが課題である。

・現在、横浜、郡山など全国４地域で公民学の連携として UDC シリーズが展開しており、今後全国に活動を広げていきたい。

2. 鼎談

「公・民・学による都市・空間づくりの可能性」

村山顕人氏、三牧浩也氏、名畑恵氏（錦二丁目まちの会所チーフ）

①錦二丁目まちの会所の取り組み紹介【名畑氏】

・錦二丁目は、かつて繊維問屋街で繁栄したが、衰退

・2000 年　シャッターペイントやえびすまつりの実施など行い、まちづくりの活動が始まる。

・2004 年【計画準備期】　「NPO 法人 まちの縁側育み隊」が支援。まちの学習実施等。

・2008 年【計画策定期】まちづくり拠点として、まちの会所オープン。たくさんの協働が生まれ始める。6 つの大学が定期的にまちに対して提案を行うことにより、地域の人たちがより地域に関心を持つ。

・現在【離陸期】　地域マスタープランの策定。まちづくり実現に向けて、いくつもの部会が立ち上がっており、部会長を地域の人が努め、自分たちで提案できる提案力ある集団になってきた。現在はまだ空間作りに繋がっていない状況だが、徐々に「歩いて楽しい道づくり」など空間作りへの機運が高まっている。

②今の取り組みに係るようになった動機やきっかけ

名畑氏：まちづくりに開眼したのは、大学２年生の時に関わった名古屋市東区の橦木館の支援活動である。現在は、師事している延藤先生の言葉「外の人は風の人。その土地でやっている人は土の人。風の人と土の人が出会って風土デザイン。」という言葉を借りるなら、私は土の人としてまちづくりに携わっている。

三牧氏：私は、大学終わってコンサルタント会社に入社したが、地方に根を下ろしているのは大学の先生が多く、コンサルタントの限界を感じていた。その後 UDCK が構想段階のとき、発案者である北沢猛先生に誘って頂いたのがきっかけである。

村山氏：私は 10 年前から海外の都市計画の研究をしている。学生の頃、研究室として都市計画マスタープランの策定に参加する機会があり、それが契機となって様々な地域のまちづくりに参加している。研究室にいると様々な情報が入ってくるので、それを地域に還元したいと思っている。名古屋に来て、この地域のまちづくりに関わるようになって６年目になる。

③現在の立場の中での都市空間作りの現実（具体的な事例を交えて）

三牧氏：柏の葉の土地区画整理事業のもともとの事業計画はとてもオーソドックスで、はっきりいえば面白みに欠ける面もある。現在、もっといいもの作らないといけないということを関係者にアピールしながら活動している。行政も UDCK に携わる中で、活動を行えているというのは恵まれていると思う。この背景には、ベースとなるまちづくり構想を公民学連携でしっかりとつくったことにあると思う。みんな、議論の土壌には乗って議論することは出来る。しかし、最後には管理や

お金の問題になる。これに関しては地元に入ってもらわないとダメなので、いっしょに地域を回りながらやっている。先は長い。

村山氏：UDCK は、現場事務所という感覚か。

三牧氏：あまり UDCK が何でもやりすぎるのは良くないが、或る程度は手助けするというスタンスでやっている。

村山氏：錦二丁目について話をすると、まちづくり構想の中では、街の真ん中に中央複合ゾーンというのがある。街区の内側なら人が住めるだろうと考えて内側を居住のゾーンとしたものの、現在容積率は 800%と高くなっている。ヒューマンスケールのまちを目指すなら、もっと容積率を下げる必要があり、街の内側で下げて、その周りの外側を高くすると良いと考えていた。しかし、まちの人からは大反対にあってしまった。容積率の調整は簡単なものではないことを痛感した。

名畑氏：村山先生は、現状分析から将来構造・構想という常にスマートな提案をしてくださるが、そういう見方はなかなか一般の人には難しかったと思う。しかし、反対する人が、その議論からでていくことはなかった。会を重ねると、理解が深まり、今は、内側に居住空間を入れていこうという方向性は見えてきた。また、自分の土地を持ち寄って会所が出来て行く絵も現在描かれていたりしている。このような共有の空間を創出していくには地区住民への意識付けが大変であり、今後も学習を続けなければならない。

村山氏：錦二丁目での構想では、地区の中央に位置する東西及び南北の通りを緑化する「グリーンクロス」というのがある。行政的な位置づけはないが、都心の交通体系を変えて行く中で、幹線道路以外の道路の使い方を考えることが現在話題となっており、「グリーンクロス」が注目されつつある。地元から声が上がると、自治体がやりづらかったもことができるので、これも構想を作ってよかったことの１つだと思う。しかし、構想づくりにはマンパワーが必要なので、現実的に他の地域でも出来るかは難しいところである。

④質疑応答

質　問：柏の葉のようなキャンパスタウンにおいて、建築や都市計画選考ではない学生がまちづくりに参加できる可能性・方向性はあるのか？

三牧氏：柏の葉では、大学で行われている先端研究が街中で展開される、ということ自体がまちづくりのコンセプト。UDCK では、大学院生が中心となった市民向けのサイエンスカフェなども行っている。また、マルシェなどには他大学生や高校生が参加している。

名畑氏：錦二丁目では、愛工大の学生からカルタをデジタルコンテンツ化する提案等があった。また、研究していた学生が、大学を卒業してもまちづくりに関っている。まちづくりパトロンのような人のもとで働きながら、地域づくりに関っている。

質　問：まちづくりの実践が研究として成立できそうか？どのようにまとめられるのか？

村山氏：正直わからない。地域を実験の場所と捉えて研究し、一般化するというアプローチもあるが、私は研究のアウトプットを地域に還元するというスタンスをとっている。大学は学生の教育の場でもあるので、参加した学生から授業の内容がより理解できたとか、自分の知識不足を痛感したとかいうフィードバックはある。

三牧氏：事例を紹介することはできるが、論文となると難しいと思う。

名畑氏：アクションプランニング・アクションリサーチ、地域でアクションしながら研究、そしてリファ

インというスタンスをとっており、活動そのものが研究といえるかと思う。

質　問：市民参加を促すには、市民の理解度を深めることが不可欠ではないか。メディアの役割が決め手になるのではないか。

名畑氏：コンテンツで何を伝えるか、内容が心に届くよう発信できるかが重要である。地域内のムーブメントを高めるツールとしてはFAXと回覧である。今は町内会の連合会がまちづくりの活動と一体的になってきているので、回覧板がちゃんと回って、アンケートをすれば80～90%の回答率にもなる。人がメディアと言える。地区外の人への情報発信は、学生がブログをやっている。情報工学をやっている人からのアプローチもある。

三牧氏：回覧板とインターネットは、最近、どこで情報発信すると情報がよくまわるかがわかってきた。満遍なく情報をまわすことと、特定の人・場所に踏み込んで流すことが大切だと思う。

⑤今後の新たな展開

名畑氏：今は、様々なまちの可能性を試す土壌が出来てきた段階である。小さな取り組みだが、未利用地をイベント的に使うとか、社会実験が行われるなど、まちの可能性をためすことがたくさんできるようになってきている。まちづくりの体験と繋がって行くよう、支援を続けたいと考えている。

三牧氏：今まで様々なネタをつないでやってきて、活動に広がりが出てきた。今後はこれをどうまとめるかが重要である。もっと、UDCKの活動を世の中に広げていきたい。

村山氏：地域まちづくりサポート制度を活用して、街のビジョンやその実現に向けたアイディアを地域でオープンに議論し続けて行くべきだと思う。最近、パブコメを実施すると以前よりも多くの意見がでてきている。この意見を次の計画や他の計画に繋げていかないといけないが、この時にメディアをどう使って行くかが重要である。